

目次

[令和元年度「51秒の被害」で引きずった25年](#)

[平成30年度「事件から24年」に関して](#)

[平成29年度「事件から23年」に際して](#)

令和元年度「51秒の被害」で引きずった25年

1995年（平成7年）3月20日、ごく普通のサラリーマンの私がいつものように地下鉄で出勤。通勤コースの日比谷線中目黒行きで僅か「51秒の被害」に遭い25年引きずる羽目となった。

朝の8時、茅場町駅で前から3両目の後方に乗った。次の八丁堀駅までは僅か「51秒」である。車内の空気はどこか重苦しく、車両の前方から後方に移動する人も。隣の方は咳をし始めた。虫の知らせか私は八丁堀駅で前から2両目の後方に移動した。

2両目に移動する間に目撃したとんでもない光景は、今でも決して忘れることが出来ない。3両目中央部の床には透明な液体がまかれ、座席にはけいれんしながら座っている人。更に衣服がはだけて体液を垂れ出しながらかいれんしている男性がポールにもたれ掛かっていた。

「何だ！これは！」全く理解不能。

次の築地駅で、病人がいるという車内アナウンスの後に乗客達が具合の悪い人をホームに運び出した。駅員が「担架だ！」と叫び担架が用意されたが、運び出した乗客達も次々に倒れた。

駅員が「緊急避難！」と叫び車内とホームにいた乗客達は騒然となり、一斉に改札から地上に逃げた。地上出口は、築地本願寺の目の前で、そこにも立ったままけいれんしている人がいて、それはまさに異様な光景だった。

地上で1両目に乗っていた会社の上司と偶然合流、タクシーで会社に向かった。車内では息苦しく感じて窓を開けた。あちこちから消防車や救急車のサイレンが聞こえていた。会社に到着しても爆弾騒ぎがあったとか依然として情報は錯そうしていた。

症状と処置について、同僚たちの手配により東京慈恵会医科大学附属病院へ。院内はまるで野戦病院のような有様だった。

ゲロゲロはしている重症者等はベットで処置を受けられたが、比較的軽症の私は受診の順番を待つ長い列に並んだ。病院から大きなビニール袋を渡されコート等の衣類を入れるように指示があった。目の症状は明るい院内のはずが暗く感じた。＜いわゆる縮瞳という症状で黒目が鉛筆の芯の太さ位しかない状態＞息苦しくて鼻水が止まらずトイレットペーパーを持ってきてかみ続けた。不調と不安の中でやっと診察を受けた医師からは、化学薬品によるものだろうと説明があったものの、治療らしい治療を受けることはなかった。その後、半年間ほど通院したが目の症状は今でも残っている。具体的には疲れがたまると目の前に「スダレ」が掛かっているようになる。また事件後の半年間位は、精神的なストレスか地下鉄に乗ることが恐怖であったが、家族の支えもあり徐々に克服。

その後、警察からの聴取と多くの内外メディアからの取材を受けた。国内のメディアからは一様な内容が多く「可哀そうな被害者…的」な取材。アメリカのメディアからは「未曾有のテロ事件なのに日本人はなぜおとなしくしているのか？」との趣旨の質問があり共感した。被害者の権利と現状に対する公共のフォローが少なく残念である。首謀者達の逮捕から裁判そして結審後に刑の執行がなされたが、「テロリスト集団」のオウム真理教の後継団体が巨額の資金を集めつつ、活動拠点（施設）の秘密裏の取得と信者を増やすなど活発に活動をしていることが許せない。またそのことに恐怖と大きな怒りを抱いているのは、私をはじめ多くの被害者などの素直な思いだろう。

「地下鉄サリン事件被害者」は、何も変わっていなくてむしろ身体的な不安、経済的な不安、サポート（国と行政）の不安とメディアの「区切り報道」による取り残され感は私だけではないはずだ。被害者、遺族、被害者家族は、それでも生きて行かなくてはならない。

絶対に風化させてはならない。私は、これからも機会ある毎に強く訴えていくつもりである。

(令和2年1月10日記)

平成30年度「事件から24年」に関して

加害者の刑の執行で考えたこと。

1995年（平成7年）3月20日、地下鉄サリン事件の被害者となった。ごく普通のサラリーマンの私が、通勤コースの日比谷線中目黒行きで車内で遭遇する羽目となった。

概要は、次のとおり茅場町駅で前から3両目の後方に乗った。次の八丁堀駅までは僅か51秒である。車内の空気はどこか重苦しく、車両の前方から後方に移動する人も。隣の人は咳をし始めた。虫の知らせか、私は八丁堀駅で前から2両目の後方に移動した。

2両目に移動する間に目撃したとんでもない光景は、決して忘れることができない。3両目中央部の床には透明な液体がまかれ、座席には、けいれんしながら座っている人。更に、衣服がはだけ、体液を垂れ出しながらいれんしている男性がポールにもたれ掛かっていた。

「何だ！これは！」

次の築地駅で、病人がいるという車内アナウンスの後、乗客が具合の悪い人をホームに運び出す。駅員が「担架だ！」と叫び、担架が用意されたが、運び出した乗客も次々に倒れた。駅員が「緊急避難！」と叫び、乗客は、一斉に改札から地上に逃げた。地上出口は、築地本願寺の目の前で、そこにも立ったままけいれんしている人がいて、それはまさに異様な光景だった。

私には、何が起きているか全く分からなかった。地上に上がったところで、1両目に乗っていた会社の上司と偶然合流することができ、タクシーで会社に向かった。車内でも、息苦しく感じて窓を開けた。あちこちから消防車や救急車のサイレンが聞こえていた。会社に到着しても、爆弾騒ぎがあったとか、依然として情報は錯そうしていた。

「パニック映画でもあるまいし！」

目の痛みと視界は暗く鼻水も止まらない。同僚たちの手配により東京慈恵会医科大学附属病院に向かったが、病院は、野戦病院のような有様だった。私は、受診の順番を待つ長い列に並んで診察を待った。医師からは、化学薬品によるものだろうと説明があったものの、治療らしい治療を受けることはなかった。その後、半年間ほど通院した。目の症状は今でも残っている。半年間は、地下鉄に乗ることが怖くなるといったPTSD（心的外傷後ストレス障害）に悩まされた。現在は克服できたと思うが、フラッシュバックなど不安な日々は続いている。>以上である。

本年、加害者の刑が執行され、本事件のひと区切りがついたとの報道もあるが、それは彼らの問題であって「地下鉄サリン事件被害者」は、何も変わってなくてむしろ身体的な不安、経済的な不安、サポート（国と行政）の不安と後継団体が今も存続し活動をする不安と「区切り報道」による取り残され感、私だけではないはずだ。事件は、当時の社会情勢に起因する背景を口にする人々もいるが、とんでもない。被害者、遺族、被害者家族は、それでも生きていかなくてはならない。

絶対に風化させてはならない。私は、これからも機会あるごとに訴えていくつもりである。

(平成30年12月21日記)

平成 29 年度「事件から 23 年」に際して

六本木に向かういつもと変わらない通勤電車の中で事件は起きた。

東西線茅場町駅で日比谷線に乗り換え、前から 3 両目の後方に乗った。次の八丁堀駅までは僅か 51 秒である。その間の車内の空気は、どこか重苦しく、車両の前方から後方に移動する人も。

隣の人は、咳をし始めた。

虫の知らせか、私は、八丁堀駅で前から 2 両目の後方に移動した。

3 両目から 2 両目に移動する間に目にしたとんでもない光景は、今でもはっきりと覚えている。3 両目中央部の床には液体がまかれ、座席には、けいれんしながら座っている人。更に、衣服がはだけ、体液を出しながらけいれんしている男性がポールにもたれ掛かっていた。

次の築地駅で、病人がいるという車内アナウンスが流れた。再び 3 両目を見ると、乗客が具合の悪い人をホームに運び出していた。駅員が「担架だ！」と叫び、担架が用意されたが、具合の悪い人を運び出した乗客も次々に倒れた。駅員が「緊急避難！」と叫び、乗客は、一斉に改札から地上に逃げた。地上出口は、築地本願寺の目の前で、そこにも立ったままけいれんしている人がいて、それはまさに異様な光景だった。

私には、何が起きているか全くわからなかった。地上に上がったところで、同じ電車の 1 両目に乗っていた会社の上司と偶然合流することができ、タクシーで会社に向かった。タクシーの車内でも、息苦しく感じて窓を開けた。あちこちから消防車や救急車のサイレンが聞こえていた。会社に到着しても、爆弾騒ぎがあったとか、依然として情報は錯そうしていた。

次第に私は、目の痛みを感じるようになり、視界は暗く鼻水も止まらない。同僚たちの手配により、私は、東京慈恵会医科大学附属病院に向かったが、病院は、野戦病院のような有様だった。私は、受診の順番を待つ長い列に並んで診察を待った。医者から私の目の痛みや視界が暗くなるという症状は、化学薬品によるものだろうと説明があったものの、治療らしい治療を受けることはなかった。その後、半年間ほど通院した。

目の痛みなどの症状は、今でも残っている。事件後、半年間は、地下鉄に乗ることが怖くなるといった PTSD (心的外傷後ストレス障害) に悩まされた。現在、PTSD は克服できたと思うが、フラッシュバックが起こるという話も聞いているので、不安な日々は続いている。また、

降車駅の出口に近い車両の位置を確認することは癖になってしまった。

事件後、私は「地下鉄サリン事件被害者の会」の活動に参加するようになり、今も事件のことを訴え続けている。

(平成 29 年 12 月 21 日記)